

脳機能障害の患者さんに接する機会は少なくない。通常、さまざまな神経心理学検査を実施し、記憶やワーキングメモリ、遂行機能の障害の程度を点数として算出し評価する。またCTやMRIといった脳画像を用いて脳の損傷部位を確認しながら、失語や失行などの巣症状との関連性を検討する。医療者はとくに目に見えるデータに頼る傾向が強く、患者さんや家族からの訴えがなければ、「困っていない」という思考に至ってしまう。しかしながら本書は、多くの医師がこれらの神経心理学的検査や脳画像検査の結果を正確に読み解くことが、高次脳機能障害の患者さんを理解することだと勘違いしていることに気づかせてくれる。

本書は、脳梗塞を発症後8年経ったいまでも残存するさまざまな症状と、逆に少しずつ改善してきた今だからこそ気づく新たな不自由感など、当事者としての日々の苦悩や葛藤が、もともと文筆家であった著者ならではのリアルな言葉と自身の障害に対する精巧な描写で綴られている。これは私にとって衝撃の告白のように思えたとし、これまで医師として高次脳機能障害の患者さんのほんの表層しか診ていなかったという厳しい現実を突きつけられた。

著者は、発症後の自分にいったい何が起きているのか、日常生活や仕事の中で何がうまくいかないのか、家族や医療者にどんなことをサポートしてほしいのか、を自分自身が理解し周囲にわかりやすく伝えるのに年単位という時間が必要だったと振り返る。発症後8年経った今でも新しい気付きがあるという。

たとえば、「脳の情報処理速度が遅くなってしまった」と著者は語る。その結果「場の把握」が難しくなる。これは、周囲の環境情報の場の把握、社会的な場、人間関係やコミュニケーションにおける場といった抽象的な場の把握まで広範囲に及ぶ。雑談において処理速度が遅くなることで話題の転換や話し手が変わることに対して状況の把握が追いつかない、急に自分に話題が振られてもとっさに言葉も出てこないため、理解が追いつかない。突然の想定外の情報やその情報が多いと脳が処理できずに固まってしまう。さらに相手の気持ちを考えながら会話することもマルチタスクなため、相手の感情や文脈上の意図をさっと把握できない。こういった日常の何気ない会話ですら、大きなストレスになるという。麻痺が目立たず会話も見スムーズな患者さんが、こ

のように困っていたことを周囲は気付かないはずである。私も知らなかった。

もし、支援の原点が「患者さんを知る」ということならば、すべての医療者に本書を読んでいただきたい。

心理支援と生活を支える視点

クライアントの人としての存在を受けとめるために

村瀬嘉代子著

金剛出版、四六判232頁、3,300円、2024年9月刊

(原田メンタルクリニック・東京認知行動療法研究所)

原田誠一

精神療法に携わる私たちにとってのかけがえのない導師、村瀬嘉代子先生の最新論文集の登場である。本書には2019年から2022年の間に発表された11編の論文が収載されており、先生の臨床の真髄を伝えてくれる珠玉の名編揃いだ。加えて二つの対談も載っていて、優れたお相手（黒木俊秀先生、橋本和明先生）を得た村瀬先生の風味絶佳の語り口を楽しむことができる。

先生はこの本でご自身の見解をわかりやすく解説しており、例えば「面接のパール―面接の基本と考えてきたこと」で「面接の基本」を三つのキーワード、1. 人を人として遇する（参考資料は知りつつも予断なく）、2. 多面的に観察し、多軸で、考える、3. 自己省察を怠らない、にまとめて、誰もが納得する要諦、初心忘るべからずの公理を示している。そして本書各所で、この「面接の基本」を敷衍する内容が具体的に説かれていて、読者が名人の極意、臨床の奥義を無理なく理解できるよう工夫されている。

先生の既刊書と同じように、この新刊書のあちらこちらで処遇困難な症例が劇的な変貌を遂げる、まるでお伽噺のような、あるいは聖者伝説のような臨床経験が披露されているが、あまたのミラクルの背景でこの「面接の基本」が見事に実践されていることが良くわかる。世の中にはお伽噺、聖者伝説のようなサプライズを実際にやってのけてしまう異次元のスゴイ人がいますね、例えば大谷翔平さん。しか

るに村瀬先生も大谷さんも異界の魔法を操っているわけではなく、基本をふまえた日頃の鍛錬、自らの優れた資質を活かすため努力、高い目標を持ち続ける意志の力あってこそ、種も仕掛けもある驚異のマジックであることが了解できる。

ご縁があり、評者が村瀬先生の新刊書の書評を担当するのは5回目である。これが最後の機会と思うので、これまでは表立って書くのを控え、暗に示唆するに留めていた内容を記してみよう。それは村瀬先生個人のことでなく、先生の前世代、同世代、評者を含めた次の世代のスーパーヴィジョンSVに関する事柄である。本書には名論「SVについての覚え書き」が収載されている他に、先生の前世代の指導者によるSVへの次の言及がある。

- ・当時、土居健郎先生は事例研究を主とした自主ゼミを主宰され、「事例を発表して批判されないのは中井久夫先生くらいだった」……という厳しさで知られていました（192頁）。
- ・主宰の土居健郎氏はじめ、中井久夫氏、吉松和哉氏、福島章氏など、当時の参加者は極めて峻厳でありつつ、各自が事例を提出し、各自の成長を促す議論が活発に展開された（217頁）。

評者が村瀬先生の前世代のSVに臨席した機会はごく限られているが、著名な指導者が感情的になって怒りを露わにし、事例提出者の臨床姿勢、資質をあからさまに否定するのを目撃したことが何回かある。今で言えば、間違いなくアカデミックハラスメントに該当するであろう無残な光景だったが、当時の聴講者の受け止め方は先生の表現、「参加者は極めて峻厳でありつつ、各自が事例を提出し、各自の成長を促す議論が活発に展開された」程度であり、カリスマ指導者によるアカハラの対応への批判は乏しかったように思う。

残念ながらこうした文化が世代間伝達してしまっており、その後の世代にも一部伝播してさまざまな悪影響を及ぼし続けている。例えば、今でも極度の緊張、萎縮、躊躇をみせる事例提出者と出会うことが稀ならずあり、背景事情を訊くとともにSVにまつわる外傷体験がある。

現在も頻繁に見られるこうした事態を、『村瀬嘉代子のスーパーヴィジョン—事例研究から学ぶ統合的心理療法』（奥村茉莉子・統合的心理療法研究会編、

金剛出版）への寄稿者の一人は、次のように正確に記載しておられる。

「もちろん、先生が厳しいコメントをされるのは毎回ではない。むしろ、治療に苦慮するレポーターに対し、包み込むような優しい態度と言葉で労ってくださることがほとんどである。だがやはり、これまでに参加してきた研究会で、居合わせた者も身を縮めるような場面も幾度かあった。しかしそれは、レポーターが患者さんと真剣に向き合っていない、もしくは、レポーター自身の感情や思い入れを優先していると判断された時である。それではプロフェッショナルとして保つべきバランスが崩れ、治療があらぬ方向に進んでしまうからであろう」（同書、126頁）。

確かにここで記されている通りなのだが、評者はこの種のテーマを取り扱う際の異なる教育方法、つまり横並びの姿勢で冷静に問題を一緒に眺めて評価し、穏やかに検討し話し合うことが可能であるし、特に精神療法の指導なのであるから「プロフェッショナルとして保つべきバランス」を維持しながら創意工夫する営為が必須だと思っている。もちろん、昭和の空気を濃厚に吸ってきた評者にとっても全く他人事ではなく、人の振り見てわが振り直せ、日頃から自戒しているところだ。通常の手紙内容から逸脱しているかもしれないが、評者の積年の想いを記させていただいた。

最後に、本書の魅力をもう一つだけ。最近の村瀬先生の新刊書の表紙では、子どもを描いた西欧絵画が採用されることが多い。『新訂増補 子どもの心に出会うとき』（2020）ではムリーリョ、『クライエントの側からみた心理臨床』（2023）ではルドンが用いられており、二幅の名画が素晴らしい効果を生んでいた。

そして今回選ばれたのは、セザンヌが愛息を描いた「画家の息子の肖像」。今でこそ西欧絵画史における地位磐石の巨匠中の巨匠であるが、生前は晩年まで公私ともに心労、失意、苦難が絶えなかったセザンヌ。そんな彼ならではの筆遣いが生み出す独自の表現が、本書に見事にマッチしていると評者は感じた。今回も絶妙な眼識と名編集者の心意気を披露して下さった金剛出版の立石正信さんに、お礼とエールをお届けしたい。